

1988年7月、ひとりの女性ジャーナリストが戦火のパレスチナで取材をはじめた

古居が12年間で撮りためた500時間を超える映像には
女たちの暮らしと闘いが刻まれている
銃弾が飛びかう難民キャンプの粗末な家の中で
赤ん坊をあやし菓子をつくる
歌うことが彼女たちの闘いだった

——古居みずえ 当時40歳

女の情感こそが、もしかしたらこの世界を
変える可能性を持つのかもかもしれない。

森達也 (映画監督・ドキュメンタリー作家)

監督の古居さんと主人公ガーダに導かれ、まるで親戚の家のよ
うな居心地で聴かせて貰える幾つもの愛おしい唄、歌、詩....
聴き惚れているうちに最後には字幕が涙で見えなくなりました。
愛や生活を綴った素朴な歌達は、民族を越え、そして戦火さえ
越えて、こんなに凄く説得力で胸に響くものなのですね。
新聞に載る遠くの国の掴みどころのない話が、自分の故郷の事
のように痛く感じられるようになりました。

根岸季衣 (俳優)

ガ GHAIDA パレスチナの詩 Songs of Palestine ダ

それまで普通のOL生活をしていた古居は原因不明の病魔に襲
われ、一時は歩くことさえ困難となる。真剣に人生と向き合っていな
かった自分を悔やむ。そして奇跡的な回復。「一度きりの人生。何かを
表現したい」フォト・ジャーナリストへ転進し人生を大きくシフトさせた。

古居は、パレスチナの人々と生活を共にしながら、女性や子供たち
を中心に取材をはじめた。半年近く定住することもあり、難民キャンプ
の人々から親しまれた古居は、ガザの人々から「ミツ」と愛称されるよ
うになる。パレスチナ・ガザ地区の難民キャンプで、本作の主人公
ガーダと出会ったのは、ガーダが23歳の頃である。英語が堪能な彼
女は古居の通訳となる。ガーダが結婚を目前にし、古い風習に反発
していることを知った古居は、彼女にビデオカメラを向けた。以来12年
間、撮影された映像は500時間を越えた。

本作はガーダの23歳から35歳までの、結婚、出産、そして自ら故郷
への旅を歩み始める現在までが描かれる。

ガーダは、古い慣習が残るパレスチナ社会の中で、自立を探索し、
さらには、イスラエルによって土地を奪われる以前の、パレスチナの
人々の暮らしや戦争体験を掘り起こそうと聞き書きの旅をはじめ。
ふるさとの料理を訪ね、歌い継がれてきた素朴な詩歌を掘り起こし、
次の世代にパレスチナの記憶を伝えようとする。

パレスチナの人々は、よく笑い、歌い、ユーモアがあり、明る
い。まるで、私の古里の家族や親戚の親しい人々とそっくりであ
る。何の罪もない私の家族が、一人ずつ殺され、家を破壊さ
れ、長年愛でてきた畑や果樹園を突然に破壊されてしまったと
したら。そしてそれが何十年も続いていざししたら。

これは私たちにとてもよく似た家族の現実である。そして、あき
らめずに生きようとする私たちにとてもよく似た女性たちのドキュメ
ンタリーである。古居みずえさんの勇気とダイナミックな優しさに震
えが止まらなかった。古居さんの感性は私たちが女性であること
に誇りを持たせてくれる。涙が溢れ、怒りが込み上げるが、何
度も笑った。とにかく見てほしい。わたし達が空気のように感じて
いる当たり前の日常がどれほど恵まれたものであるか。そして誰に
もその日常を奪う権利はない。なんとかしなければ。しかし、その
前にこの宝石のような映像を見て欲しい。

渡辺えり子 (女優)

その時、私のなかには
失うものがなにもなかった

「もってのほかです」とガザ地区に行きたいと願った僕たちは
コーディネーターにたしなめられた。ただでさえ二重にも三重にも
イスラエル軍の検問を通過しなければたり着けない状況
下なのだ。ジャーナリストでもない僕たちが簡単に入れる場所
ではない事は現地の様子から伺い知る事が出来た。なので
最初の感想は本当によくこれが完成したものだ、と単純に感
心した。しかも12年という歳月。古居さんはその間何度となく自
らの命も危険にさらして困難に立ち向かった事であろう。それだ
けでも貴重なのだが、貴重な故にこのドキュメンタリーを「パレ
スチナ問題の教科書」として観ないでほしい、と願う。

なぜならここに描かれているのは一人の女性が当たり前のよ
うに結婚を前にして揺れ動き、恋をして、子供を産む、という当
たり前の日常だからだ。それはまったくもって我々の日常と変わら
ない。ただ、その日常の中には当たり前のように戦時下である、と
いうことも含まれている。ただそれだけなのだ。ただそれだけだか
ら衝撃がある。それは同じ人間がこの地球上で起こしている事
実として衝撃なんだ。

丹下紘希 (映像ディレクター)

Photo by 広河隆一